

## -1 情報社会論2(理論)

# 情報の消費と浪費

## 情報体概念に基づくコミュニケーションの形

### Consumption and Waste of Information

### The Form of Communication

### based on the Concept of Information Entity

○曾我 千亜紀<sup>1</sup>, 井上 寛雄<sup>2</sup>, 霜山 博也<sup>3</sup>, 中村 啓介<sup>3</sup>,  
大澤 健司<sup>3</sup>, 米山 優<sup>3</sup>,

Chiaki SOGA, Hiroo INOUE, Hiroya SHIMOYAMA, Keisuke NAKAMURA,  
Kenji OSAWA and Masaru YONEYAMA

<sup>1</sup>大阪産業大学人間環境学部 Osaka Sangyo University, Faculty of Human Environment

<sup>2</sup>中京大学非常勤講師 Chukyo University

<sup>3</sup>名古屋大学大学院情報科学研究科 Nagoya University, Graduate School of Information Science

**Abstract** Information can be consumed without limit unlike material resources. Asking ourselves about what may appear as an issue, we plan on questioning the way we consume information that benefits the indeterminateness from an ethical point of view. Simply recommending the prodigality of information or introducing groundlessly corporeality in communication does not seem to be the best way to act. We intend to expose a new manner of spending information, clarifying the meaning of corporeality and its relationship with communication.

**キーワード** 情報体, コミュニケーション, 身体性, 贈与, 欲望

#### 1. はじめに

本発表は昨年の発表である『贈与としての情報』を踏まえ、さらに発展させたものである。前回私たちは出発点として、見田宗介の問題意識（限りある物質資源を前に、大量生産→大量消費→大量廃棄のサイクルを脱するために私たちは何をなするか）を共有した。この問いに対して見田は無際限に活用しうる「情報」概念を積極的に捉え直すことによって答えようとしていた。このような見田の問題意識とそれに対する答え（情報概念の再問題化）から、私たちは次のような指摘をした。すなわち、サイバースペースにおいて、単に効率性や有用性によって理解しようとする見落としになってしまうコミュニケーションの形があるというものである。それが贈与という観点から捉え直された情報であり、コミュニケーションである。

ところで、情報の無際限性を主張するとき、それを制御すべきか否かという問題が生じてくる。例えばバタイユは、「奢侈」にこそ人間を見て、禁忌に縛られることのないエネルギーの解放を目指す。この立場を敷衍するならば、情報に関しても際限なく消費する姿勢——情報の消費がさらなる消費を呼び、記号がさらなる記号を呼ぶような姿勢が称賛されることになるだろう。それに対して、たとえ情報が無際限に湧出する資源と見なされるとしても、ある程度のコントロールを引き入れるべきだという考え方がある。ただし、もし情報の消費を制御するのであれば、それがどのような仕方になされるべきか、どのようなあり方をする

のかを問わねばならない。

本発表ではまず、情報の無際限な消費について考察するために、國分功一郎の言う浪費と消費の概念の区別を検討し、それを情報論の視点から問い直す。その上で、情報や記号の消費を制御しようとする際に、いかに無造作に身体あるいは身体性が導入されているかを指摘する。最後に、身体および精神が情報コミュニケーションにおいてどのような形で関わるべきかを論ずることとする。

#### 2. 浪費と消費

##### (1) 國分功一郎によるボードリヤール解釈

國分功一郎『暇と退屈の倫理学』の第四章は、鋭いボードリヤール解釈である。彼はボードリヤールを引用しつつ、浪費（consumption）と消費（consommation）を区別し定義する<sup>1)</sup>。

國分はまず、否定的に語られることの多い贅沢を推奨することから始める。必要なものを消費するのではなく、必要を超えて物を受け取ったり、吸収したりすることが贅沢であり、浪費であるという。一見、無駄に思われる浪費であるが、しかし、浪費はある一定の時点で必ず止まると國分は言う。引用しよう。

浪費は満足をもたらす。理由は簡単だ。物を受け取ること、吸収することには限界があるからである。身体的な限界を超えて食物を食べることはできないし、一度にたくさんの服を着ることもで

## -1 情報社会論2(理論)

きない。つまり、浪費はどこかで限界に達する。そしてストップする。（國分, 2011:144-145）

それに対して、消費は留まるところを知らないとされる。無駄に思われる浪費が限界を超えることがない一方で、消費は無際限である。

消費は止まらない。消費には限界がない。消費はけっして満足をもたらさない。

なぜか？

消費の対象が物ではないからである。

人は消費するとき、物を受け取ったり、物を吸収したりするのではない。人は物に付与された観念や意味を消費するのである。ボードリヤールは、消費とは「観念論的な行為」であると言っている。消費されるためには、物は記号にならなければならない。記号にならなければ、物は消費されることができない。（國分, 2011:145-146）

浪費には限界があるが消費には際限がない。これはまさに見田宗介が、物的資源の限界と情報の無際限性を対比させる図式と一致する。ただし、國分は「身体」の満足による浪費を推奨するという倫理の形を提示する（それはおそらく結果的に、物的資源の消費に歯止めをかけることになるだろう）のに対し、見田は唯一の無際限な資源である情報を活かす倫理を探求しようとするのである。

確かに身体的満足は、現代の人々が見失っているように思われる物のレベルでの充足をもたらさうし、そのおかげで記号や観念にとらわれずに物と相対することができるようになるだろう。事物への回帰は、倫理における一つの可能性であるように思われる。

### (2) 中沢新一のモース批判

消費に身体性を導入して「物」を取り戻そうとする國分の方向性と、レヴィ=ストロースを介してモースを批判的に継承する中沢新一の方向性には類似がある。中沢もまた、「モノ」の重要性を主張しているからだ。

中沢が師と仰ぐレヴィ=ストロースは「モース著作集への序文」において次のように述べていた。

社会科学がおかれる状況の特殊性は、社会科学の対象が対象であるとともに主体でもある ---- デュルケームとモース ---- の言葉でいえば、《物 chose》であるとともに《表象 représentations》である ---- という、その対象の内在的な性格に基づくいま一つ特異な性質をもっている。（Mauss, 1968:24=1973:19）

そのうえで、『贈与論』におけるハウの概念が独り歩きしてしまうことを、レヴィ=ストロースは懸念する。なぜならそこには物という視点が欠けており、ハウのみに -- すなわち表象のみに -- 囚われてしまう危険性があるからだ。中沢もレヴィ=ストロースと同様、モースの功績をたたえつつも、次のように批判する。

モースは贈与に対する返礼（反対給付）が義務とされることによって、贈与の環（サイクル）が実現されると考えたのだが、そのおかげで、贈与と交換の原理上の区別がなくなってしまったからである。（中沢, 2003:5）

社会学的思考に欠けているものがあるとする、それはモノ（Ding）である。モノは贈与や交換や権力や知の円滑な流れをつくりだすすべての「環（サイクル）」に、いわば垂直方向から侵入して、サイクルを断ち切ったり、逸脱させたり、途方にくれさせたりすることで、「環」の外に別の実在が動いていることを、人々に実感させる力をもっているのである。（中沢, 2003:6）

ここで中沢は、純粹贈与と贈与、そして交換を三つの要素とする原理を考えることによって、モース（そしてレヴィ=ストロース）の考えを独自に展開していく。ただ表象だけが行き交う世界に、物や自然 -- 純粹贈与はまさに自然によってもたらされる -- が介入することが必要である。人々はそのような介入を意識的にか無意識的にか気づかないふりをする。しかしながら、コミュニケーションにおいて物や自然を見ずにすまずことはできないであろう。

### (3) バタイユによるポトラッチ解釈

贈与における以上の側面を見る限り、身体性導入による倫理の可能性はある程度の説得力を持つように思われる。その一方で、見田宗介が主張するように、贈与が極限まで押し進められるポトラッチの例から、情報資源の無際限性を積極的に活かす方向を模索することもできる。ポトラッチでは、決して返すことのできない量の贈り物をしたり、挙句には贈り物を見せただけで破壊したりすることさえ行われる。

バタイユは、モースを踏まえつつポトラッチを次のように理解する。一見、無意味で無駄に思われる度を越した贈与と破壊が行われている。破壊は何ももたらさないかのように見え、そのような行為を理性的に理解することは不可能であるように思われる。しかしながら実のところ彼らは破壊と引き換えに「身分」を得ているのである。

この制度（ポトラッチ）の重大な意味は、損失によって ---- そこから身分、名誉、階級制内での地位がもたらされ ---- 実質的所有が成り立つ点である。贈物は損失と、つまり部分的破壊と考えねばならない。破壊したい望みを一部分受贈者に振り向けるわけだ。（Bataille, 1949:34=1973:275）

「理想的なかたちは」とモースは指摘している。「ポトラッチを与えて、返報を受けないことであろう」。この理想は慣習の中に可能な対応物を見出せぬような或る種の破壊行為を行なうことによって実現される。（Bataille, 1949:34=1973:276）

## -1 情報社会論2(理論)

たしかに、破壊を身分や地位との引き替え行為と見なすのであれば、返報を受けないことが身分の確立をもたらすことになる。しかしながら、返すことのできない贈与はコミュニケーションを養うことができない。

中沢新一は返礼しえない贈与に対して懐疑的であった。彼は『小僧の神様』を例に挙げ、純粋な贈与を行なうことの難しさと、純粋贈与の関わることによって引き起こされる贈与者自身の負い目（神と同一視される）を指摘する。それに対し、自然は純粋な贈与をなす。ここから中沢は独自の純粋贈与論へと進むが、ここでは論じない。

一方、行き過ぎた贈与であるポトラッチについて、それを純粋な贈与と同一視するのではなく、そこから無駄なものの消費や濫費の意義を問うことはできよう。そのような消費や濫費は、人間だからこそなすものである。バタイユの言うように、必要性のみに囚われず、「奢侈」に流れることが、逆説的ではあるが最も人間的である。この点において、バタイユに従えば「文化」は「奢侈」であると言えよう。

ポトラッチの例が私たちに教えるのは、少なくとも、物と物の交換や、物と貨幣の交換とは別の次元でのやり取りが行われる可能性である。これを「評価」や「名誉」へと繋げることによって、サイバースペースにおけるコミュニケーションを別の形で捉える可能性がひらかれるであろう。

### 3. 情報体概念の導入

#### (1) 消費と浪費のあいだ

物ではなく記号を消費することは、この歯止めのきかないエネルギーによって人々が動かされることを意味する。記号の消費は決して満足に行き着くことはなく、差異を求めてとどまるところを知らない。

國分功一郎はこれに対して、消費ではなく浪費を、身体による満足を取り戻すことが重要であると主張したのであった。

しかし身体による満足が必要性の次元へと戻ってしまうことであれば、人間的な部分、文化的な要素を排してしまうことになる。この矛盾を脱することは実は容易ではない。消費と浪費、奢侈と必要性の狭間を見出さなくてはならないからだ。

消費やエネルギーは極限まで推し進めて良い。しかし方向性を制御すべきである。そのためには情報体の議論をしなくてはならない。

#### (2) 情報体とは何か

情報体とは何か。端的に言うならば、それは精神と身体が区別されつつも合一しているという状態を指す。情報体は一つの実体であると同時に機能でもある。例えば情報の〈意味〉と〈物理的支持体〉の区別と合一を情報体と見なすことができる<sup>2)</sup>。

本論で主張したいのは、浪費でも消費でもない新たな「費やし方」を考えなければならないということである。浪費は、身体に依拠して制限をかけようとする。消費は、精神（記号や意味）に基づいて留まるところ

を知らない。目指すべきは、消費のエネルギーの方向性を制御して、（その制御は身体に拠るところが大きい。なぜなら、やはり私たちは「事物」にも対峙しているのだから）、それでいて、事物から最終的に離れた（あるいは離れているように見える）力の発揮である。事物と精神の区別と両立が見事に実現されたとき、そのような「費やし」は情報体となり、情報の新たな次元を拓くのである。

バタイユの言うように、単なる禁忌を犯す、タブーを破るということ自体が目的化されてしまえば、それは単なる既存の社会システムや体制に対する反発でしかない。すなわち、既存のシステムを超え出すことは決してできない。なぜなら、このような行為は「反する」というところに重きがあり、既存のシステム自体が破壊されたり、意味をなさなくなってしまうとしたら、「反する」こともまた不可能になってしまうからだ。

一方で、「身分」を得るという考え方は、サイバースペース上で「評価」を得るという考え方へとつながりうる。リナックスの創始者やフォーラムで質問者に対して丁寧な回答を返す人々、ウィキペディアの執筆に携わる人々などは、金銭的な見返り（つまり、貨幣経済の枠組みで理解されるような報酬）を求めているわけではない。彼らが喜びとするのは、むしろ評価であり、自らが発信した情報を多くの人々が認めることそれ自体である。

ただし、次の点には留意すべきである。ポトラッチの破壊が結果的にある種の「身分」をもたらすとしても、だからといって必ずしも、彼らが最初から「身分」を求めて、見返りだけを目的として、破壊を行なっていることを意味しないという点である。一般に、何ら見返りも期待できないような状態で贈与をする、贈り物をするという行為は理解しがたく思われている。しかしながら、彼らが破壊に赴いたのは、その後にく評価のみに動かされているわけではなく、彼らがすでに多くのものを受け取っている、すなわち「反対給付義務」を感じているからとも説明できるのだ。すでに自分たちは多くのものを得ている、受け取っているということが出発点であるにも関わらず、この出発点は隠されて私たちの目には映らない。

#### (3) 贈与のコミュニケーション

中沢新一が、人間にとって純粋贈与は不可能である、あるいは非常に困難な行為であるというとき、彼が念頭に置くことを忘れてしまっているのは（あるいは彼の議論から表立って見えてこないのは）、私たちがすでに何かに負っているという事実である。そして、贈与と返礼を、直接的に二者間で行われるやり取りにとられて（いるかのように）考察してしまっているところが問題である。贈与はもっと開かれた不特定多数のネットワークの中で論じられるべきである。

情報コミュニケーションもまた同様である。何も受け取ることなくすべてに先立って情報を発信できる人は誰もいない。私たちがやり取りしている情報はすでに網の目の中を伝わってきたものであり、パスされた

## -1 情報社会論2(理論)

ボールである。最初にボールを置いた者のみが純粋な贈与を為したと言いうるが、それは自然や神の仕業であって、私たちはすでに予め情報ネットワークやボールゲームの中に投げ込まれている。

情報を循環させたりボールというパスを出し続けたりすることは、気づかぬうちに私たちがコミュニティに参加して贈り物をするのである。結果的に与えられる評価を目指すことはもちろん可能である。それは一見、等価交換のコミュニケーションにも思われる。ただし、従来の貨幣経済とは別の次元の枠組みへとシフトする興味深い潜在的力を秘めている。いわば金銭で計量できるような等価交換とは異なる交換の始まりである。しかし、この段階への到達を完了と考えてしまえば、「評価」が「金銭」に読み替えられるだけに終わってしまう怖れがある。「評価」が貨幣的に機能してしまうと、結局のところ共通の指数としての数値に還元され、評価の質や深みが消え去り、「できる限り大勢の人々に評価されること」を最大の価値としてしまいかねない。価値評価というものはそれほど単純なものではない。私たちは共通の一つの基準というよりも、多様で多彩な評価基準を並立させるようなシステムを考案する必要がある。

### (4) 欲求と欲望

再び國分功一郎の議論へと戻る。彼自身、消費と浪費の区別はさらに洗練されるべきであると考えているようだが（中沢/國分, 2013:70）、ただ単に身体への導入を素朴に行なったところで、両者の区別はそれほど容易ではないだろう。

問題は身体もまた精神に多大なる影響を受け、いわゆる本来の（自然の）限界を大きく踏み越えることである。例えば、過食である。そもそも、自分の欲求が精神に由来するものなのか身体に由来するものなのか見極めることはかなり困難な行為である。今、ある本を読みたいと思っている自分。それは記号に駆動されているのか、本来的欲望なのか。ある音楽を聞きたいと思っている自分。この欲望はどこから来たのか。

おそらく、バタイユの考える文化とは、文化のある一面を表してはいるが、それがすべてではない。文化的なものへの憧憬や、文化への欲望は、単なる身体的なものでも、単なる精神的なものでもおそらくない。むしろ情報体という概念に結晶されるような、身体と精神が区別されつつも合一し、区別と合一の両立が見事に成立するときに、ひとは初めて文化や文化的事象に対峙することができる。プラトンはアリストファネスを批判して、エロースを次のように定義する。本来あるべきものがないという欠如、喪失感からではなく、善きものが欠けているからこそ求めるという心の動きがエロースである（Platon, 206A=1974:86）。これを踏まえた上で、レヴィナスは渴望（*désir*）について語る。他者を求めるのは必要性に基づく欲求（*besoin*）ではなく *désir* である。決して満たされることはないが、だからこそ掻き立てられる渴望なのである（Lévinas, 1968）。

他者とは、私とは異なる者である。私の持たない何

かを持ち、私の知らない何かを知る者である（Lévy, 1994:24）。それを求める心が渴望でありエロースである。それは単に誰かを求める心の動きだけを意味するわけではない。これらは私たちが何かを学んだり、コミュニケーションしたりするときにも当てはまる。文学や美術作品や情報を求めたり解釈したり表現したりするとき、ひとは必要性からだけではなく、喪失感あるいは体制や禁忌への反抗からだけでもなく、よきものを求めるという渴望によっても動かされるのである。

### 4. おわりに

以上のように、情報の〈費やし方〉に関して、身体主導の浪費でも精神主導の消費でもないあり方を考察した。今後はこのような情報の〈費やし方〉と贈与の関係についてさらに明らかにした上で、贈与のコミュニケーションを正当に評価しうるシステムを提起しなければならないだろう。今後の課題としたい。

### 補注

- 1) ボードリヤール自身は浪費を *gaspillage*、消費を *consommation* と表現している。一方、見田宗介はこのボードリヤールの表現とバタイユやモースを参考にしつつ、消費の二つの形態を区別している。これらを勘案したうえで、國分の言う浪費を必要性のみ囚われず使い果たすという意味で *consumation* と、消費を *consommation* と訳すことにしたい。
- 2) 情報体に関しては、拙論『情報体の哲学』（2012）を参照されたい。

### 参考文献

- 1) 國分功一郎（2011）：『暇と退屈の倫理学』，朝日出版社。
- 2) 中沢新一（2003）：『愛と経済のロゴス』，講談社。
- 3) 中沢新一/國分功一郎（2013）：『哲学の自然』，太田出版。
- 4) 見田宗介（2011）：『定本 見田宗介著作集 I：現代社会の理論』，岩波書店。
- 5) 米山優（2011）：『情報学の展開』，昭和堂。
- 6) Bataille, G. (1949) : “La part mauite”, Éditions de Minuit, 生田耕作訳，『呪われた部分』，二見書房，1973。
- 7) Baudrillard, J. (1970) : “La société de onsumation”, Éditions Planète, 今村仁司/塚原史訳，『消費社会の神話と構造』，紀伊國屋書店，1979。
- 8) Lévinas, E. (1968) : “Totalité et infini”, Nijihoff.
- 9) Lévy, P. (1994) : “L’intelligence collective”, La Découverte.
- 10) Mauss, M. (1923-1924) : “Essai sur le don : Forme et raison de l’échange dans les sociétés archaïques”, L’année sociologique, seconde série, P.U.F., 吉田禎吾/江川純一訳『贈与論』，ちくま学芸文庫，2009。
- 11) Mauss, M. (1968) : “Sociologie et anthropologie”, P.U.F., 有地亨/伊藤昌司/山口俊夫訳，『社会学と人類学 I』，弘文堂，1973。
- 12) Plato : “Symposion”, 鈴木照雄訳，『饗宴』（『プラトン全集第五巻』），岩波書店，1974。